

されど天界は変わらず

東京大学理学部天文学教室 OB 編
A5版 174頁 1500円
竜鳳書房 (Fax 0262-28-1105)

東京帝国大学の天文学教室が、太平洋戦争の末期、空襲をさけて長野県諏訪地方に疎開していた日々の記録である。戦後45年経った或る日、教室の古い資料の山の中から偶然に見つかった当時の日誌を軸に、関係者の思い出や感想、聞き語りなどを編み合わせて、意外なドキュメンタリー読み物を構成している。

第I章には、第二次疎開荷物が着いた1945年4月29日(天長節)に始まり、同年10月24日に故畑中武夫氏が後記した「安心! 安心! これで終り。」に至る上諏訪日誌と、8月2日から始まり、「スワに戻り、のみ残しの清酒3本ヒヤでのむ。ダンチャン ダウン。」という、8月20日の故石田五郎氏の文で終わる南安雲陸地測量部への動員記録が納められている。

第II章「天界を夢見続けた人々」には、第I章に挿入文のある三澤邦彦、檀原毅氏に続いて、進士晃、小尾信弥、ジョセフ M. 岡田、海野和三郎、大脇直明、守山史生、井田茂、北岡清の諸氏の最近の文章が納められ、前章の日誌に、転変の時代を隔てた光を照射している。上記の石田氏以下は、皆天文学科の学生であった。

第III章「若き天文学者たちとのふれあい」は、助手であった故古畑正秋、畑中武夫氏らと親しかったアマチュア天文学者五味一明氏を中心とする

当時の上諏訪地方の人々との生活を、座談などもとり交せて、ゆったりと語っている。この章は特にそうであるが、全篇を通じて図、写真、挿画などを豊富に収録することによって、そのドキュメンタリー性を高め、複数の時代でシャッターを切った風物誌ともいえる作品に仕上げている。

当時上諏訪で講義をされた藤田良雄先生が、序文の中で、「その日その日の侘しい生活、乏しい食糧事情、時には農家の田畑の草取りのアルバイトをして帰って来た学生諸君が、今日は銀飯^{めし}を食べたというはなしに羨望を感じず私たちがであった。」と述懐されている。そのような逼迫した時代状況と天文学を志す若者達という不思議なとり合せは、淡々と記され語られている本書に、期せずして、「人の営みとは一体何なのだろうか」という、重い問いかけをさせている。

敗色も濃くなった頃、訪ねて寄られた小平邦彦先生(数学教室)が、炬燵を囲んだ畑中助手に、「小惑星がニューヨークに衝突する確率はどの位ありますか。期待できませんかね。」と訊ねたと、守山氏が書いている。天文学的な議論は、その程度しかでてこない。ことさらに天下国家を論じているわけでもない。あくまでもこれは、一天文学教室の疎開の記録である。にもかかわらず、誰にでも一読を薦めたい好著である。資料の収集や編集に携わった人々の地道な努力が、本書の個性的な構成となって光っている。私は一気に読み通してしまった。

小平桂一

月報だより

国立天文台一般公開のお知らせ

国立天文台三鷹地区の一般公開が、1993年11月13日(土)13時から18時30分まで開催されます。本年のメインテーマは「すばるが拓く宇宙」で、すばる望遠鏡の建設の現況と完成後に期待される観測成果などを中心として展示・講演会が行われます。この所、毎年天気にある程度恵まれているので、見学者数が増え4000名を越える

ようになってきました。毎年一つずつ新しい試みをしており、今年は人気のある講演会をより充実するため、より収容力のある近くの大沢コミュニティーセンターをお借りして行う事にしました。又、開催日は学校の休みに合わせて第二土曜日とし、今後は毎年11月第二土曜日にする事を考えています。公開する施設は例年とほぼ同じですが、各場所での質問を受ける体制を充実する予定です。なお国立天文台には駐車する場所がありません。毎年、違法駐車のため周辺住民の方に御迷惑をおかけしていますので、車でおいでにならないで下さい。問合せ先